



特集

建築のまちを旅する 14

大磯

政界の奥座敷は今、
湘南の「邸園文化」を
象徴する地に



表紙の写真

〈旧大隈重信別邸・旧古河別邸〉 旧状を留めている部分

設計 | 不詳

大隈重信が購入・改修し、別邸として利用した建物が大磯に残り、「明治記念大磯邸園」の一部として保存・整備されている。全面開園までは庭園のみの公開だが、邸宅の外観を見ることはできる。増改築を経た邸宅のなかで、写真の部分は大隈時代の旧状をとどめ、当時の建築技術の粋を集めて建てられたことがうかがえる。邸宅は庭園と一体となるようにつくり、庭園と海の風光明媚な眺めを楽しめるように、当時としては斬新なガラス戸が南側に多用されている [写真:石田 篤]

左写真

〈旧吉田茂邸〉 アルミパイプで小舞を 表現した下地窓

設計 | 木村得三郎 (応接間棟)、吉田五十八 (新館棟)

内閣総理大臣として戦後日本の礎を築いた吉田茂は大磯に本宅があった。増改築を重ねた4棟構成で、戦後の増改築の際は建築家の木村得三郎、次に吉田五十八が設計を手がけた。2009(平成21)年に火災で母屋が失われたが復元され、現在は一般公開されている。写真は玄関にしつらえられた下地窓。焼失前の玄関ホールは吉田五十八が改修設計を行っており、アルミパイプを用いて小舞を表現したこの下地窓は、吉田五十八の近代数寄屋建築の手法を伝えるものだ [写真:石田 篤]

LIXIL eye no.26
2022年1月20日発行

発行 | 株式会社LIXIL
編集発行人 | 早川氏幸
LIXIL Housing Technology Japan
TH統括部
〒136-8535
東京都江東区大島2-1-1
Tel: 03-6837-1646
Fax: 03-6837-1662
制作 | 株式会社フリックスタジオ
デザイン | 株式会社ラポラトリーズ
印刷 | 竹田印刷株式会社

* 本記事の無断転載を禁じます
* 本文中の敬称は省略させていただきました

『LIXIL eye』のバックナンバーは
インターネットでご覧いただけます。
<http://www.biz-lixil.com/column/lixileye/>

CONTENTS

特集

04 建築のまちを旅する | 14

大磯

06 テーマ1

政界の奥座敷は今、 湘南の「邸園文化」を象徴する地に

ナビゲーター | 水沼淑子

10 旧大隈重信別邸・旧古河別邸 / 陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸 / 旧吉田茂邸

14 テーマ2

混血孤児を救った澤田美喜 記念館は免震建築の先駆け

16 大磯・平塚・茅ヶ崎建築めぐり

22 住宅クロスレビュー | 14

町家改修

河井敏明「上京まちや2」× 森田一弥「法然院の家」

32 建築家の〈遺作〉 | 11

宮脇 檀「町田の家」

談 | 山崎健一

36 新世代・事務所訪問 | 14

miCo.

ナビゲーター | 門脇耕三

44 構造家の新発想 | 14

極限まで部材を絞り込む 三原悠子

48 触覚デザイン | 11

菊竹清訓のドアハンドル

ナビゲーター | 笠原一人

52 土木のランドスケープ | 14

気仙沼内湾防潮堤

ナビゲーター・文 | 八馬 智

58 TOPICS

省エネルギー住宅の設計をサポートする「LIXIL省エネ住宅シミュレーション」を無償提供
文 | 秋葉義司

60 INFORMATION

LIXILビジネス情報サイトのご案内 / LIXILからのご案内 / 展示のご案内

64 紙上の建築 | 14

スケールと解像度

寺田尚樹 + 平手健一 (テラダモケイ / 寺田平手設計)

大磯

日本最大級の屋外プール「大磯ロングビーチ」が横たわる大磯の海岸は、実は明治以来の一大別荘地だ。維新後宣教師によって開かれた軽井沢の別荘地とほぼ時を同じくして、有力者の邸宅が次々と建てられていった。

大磯丘陵の山を背に、日本で最初期に海水浴場が開かれた海岸が連なる保養地として、早くから注目されたのだ。

政界、財界の立役者の別荘が数十軒集まっていたが、震災、戦災で数を減らした。

戦後多くは企業の所有となるも徐々に使われなくなり、かろうじて名建築が遺されている。

いま、自治体に寄贈された建築を修復保存して、公開していこうという動きがある。

明治記念大磯邸園、神奈川県立大磯城山公園がその主なエリアで、いずれも庭園が見事。

旧大隈重信別邸・旧古河別邸、陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸、旧吉田茂邸を中心に歩きながら、

庭園と建築が融合した邸園文化を堪能しよう。

「旧吉田茂邸」を日本庭園から見る。邸宅は山を背にしつつ、庭園と一体となるように建てられており、大磯の「邸園」の特徴的なあり方を示す。母屋の2階からは相模湾の向こうに富士山を望むことができ、吉田茂は生前、その眺めを毎日のように楽しんでいたという。庭園は心字池を邸宅の正面に配置した池泉回遊式で、世界的な作庭家の中島健が設計を手がけた。心字池の中央には、吉田邸に向かう亀の姿をイメージした亀島があり、背中に石造の十三重塔を載せている。現在、約9,000坪に及ぶ敷地は神奈川県立大磯城山公園の一角として、また、邸宅は大磯町郷土資料館の別館として管理・運営されている【写真：石田篤】

テーマ1

政界の奥座敷は今、湘南の「邸園文化」を象徴する地に

ナビゲーター | 水沼淑子（関東学院大学名誉教授）

取材・文 | 長井美咲
写真 | 石田 篤（特記以外）

01 | 松本 順

医師（1832-1907）。海水浴の効用を説き、大磯に海水浴場を開設したほかに、牛乳の飲用も奨励。陸軍軍医として衛生制度の確立に尽力し、民間には公衆衛生的な啓蒙を行った。生産現場での粉塵を防ぐために、マスクの着用を広めたともわれている



東海道の松並木

関ヶ原の合戦に勝利した翌年、徳川家康は東海道の宿駅の制度を設け、その整備を行った。次いで36町を1里（約3.9km）として一里塚をつくり、街道筋に松や榎などを植えた。大磯中学校前をはじめ、大磯町内に残る松並木はこのときに整備されたもの。松並木は暑い夏は旅人に日陰を与え、冬は旅人を吹き付ける風から守り、また、旅程の目安にもなる大切なものだった

02 | 照ヶ崎海岸

松本順が1885（明治18）年に海水浴場を開設した海岸。松本は蘭書で海水浴の効用を知り、沿海の適所を探しつづけて大磯にたどり着き、漁の邪魔になるという地元の漁師を説得し、海水浴場を開いたという。現在は照ヶ崎海岸での遊泳は禁止されている



神奈川県大磯町は江戸時代に東海道の宿場町として栄え、明治中期に沿海に海水浴場が開かれてからは、保養地として政財界の要人が次々に邸宅や別荘を構えた。邸宅は当時の建築技術の粋を集め、風光明媚な景観を活かした庭園と一体となるようにつくられていた。

これらの邸宅と庭園、すなわち「邸園」は大磯の歴史や文化を伝えるものであると、地元では保全活用に取り組む団体が行政とも協働して活発に活動している。それが「明治150年」関連施策の一環として国営の「明治記念大磯邸園」の設置に結びついた。神奈川県を中心に文化財関連や景観まちづくり関連の審議会委員を数々務める関東学院大学名誉教授の水沼淑子氏に、大磯の代表的な「邸園」を案内願った。

東京から東海道線に乗り、大磯駅に向かう。神奈川県南部の相模湾沿岸一帯を指す「湘南」という呼称は大磯が発祥だという。大船駅を過ぎると、藤沢、辻堂、茅ヶ崎、平塚と湘南エリアの駅が続き、大磯駅に到着。屋根にオレンジ色の瓦を載せた、味のある木造駅舎は1925（大正14）年に建てられたものだ。駅前にはコンビニのほかちょっとした商店しがなく、のどかな空気が流れている。

大磯駅は1887（明治20）年、東海道線の横浜駅から国府津駅までの開通と同時に開業した。大磯駅を設置する計画は本来なかったが、海水浴場を訪れる人々のために、初代陸軍軍医総監を務めた松本順⁰¹が、そのころ初代内閣総理大臣の任にあった伊藤博文に設置を働きかけたといわれている。

松本の提唱により、大磯の照ヶ崎海岸⁰²に海水浴場が開かれたのは1885（明治18）年のこと。干潮と満潮の差が大きく、海水は河川の水があまり混ざっておらず、波が強く、塩分を多く含む、海水の温度が日によって変わらないことが海水浴に適していると考えられた。当時の海水浴は主に潮湯治、いまでいうタラソテラピーで、潮流で身体に刺激を与え、海辺の清涼

な空気を吸うことだった。

北側に山を背負い 南側に海が開ける

医学界の最高権威者が勧めたことで海水浴は一気に一般に広まり、鉄道の開通もあって大磯の海水浴場は大いに繁栄した。行楽地の要素も備えた大磯は全国有数の保養地となり、別荘の戸数は1907（明治40）年に100戸を超え、以降も増えつづけた。

現在の大磯海水浴場は、大磯港の東にある北浜海岸に設けられている。照ヶ崎海岸は遊泳を禁止されているが、磯遊びや釣りを楽しめる。また、西に向かっては、古代から「こゆるぎの磯」と呼ばれ、景勝地として万葉集等にも詠まれた砂浜が長く延びる。

ナビゲーターの水沼淑子氏は茅ヶ崎に生まれ育ち、現在も茅ヶ崎に暮らし、湘南一帯は研究だけではなく生活の拠点でもある。「湘南エリアはどこも夏は冷涼、冬は温暖な気候で、真冬でも暖かい日にはTシャツに短パンで歩いている人をよく見かけます」。

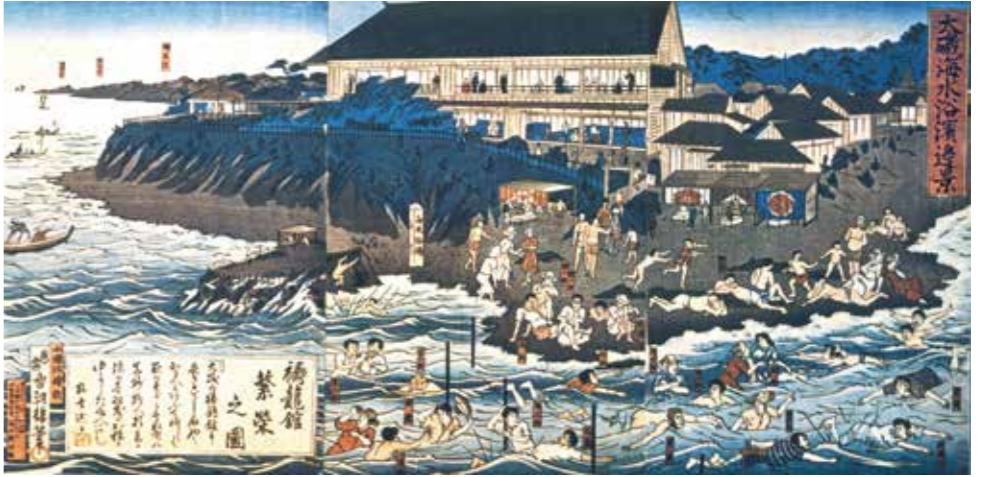
大磯の地勢は北側に山を背負っているのが特徴で、その丘陵が北からの風を防ぎ、南風が入ってくるから冬も暖かい。「北側に山があり、南側に海が開けているのは海浜別荘地の条件のひとつ。山がないと格が少し落ちます」と水沼氏。大磯と同様に海浜別荘地の条件を備えるのが葉山で、葉山には御用邸がある。「大磯に御用邸がつくれなかったのは、広大な敷地が残っていなかったからでしょうね。宿場町

三代歌川国貞

「大磯海水浴浜辺景 栲龍館繁栄之図」

1891（明治24）年

明治期の照ヶ崎海岸の様子を伝える錦絵。松本順が親交のあった大勢の歌舞伎役者を大磯海水浴場に誘致したときに描かせた。この錦絵が東京で販売され、東京からさらに多くの人たちを大磯海水浴場に呼び寄せるきっかけをつくった。奥に描かれているのは「栲龍館（とうりゅうかん）」という大旅館で、当時は医療法だった海水浴に付随する診療施設として松本が1887（明治20）年に開業。50室余りの客室を備えていた。当時の海水浴は海中で塩水に浸かるのが目的で、この錦絵に描かれている海水浴客たちも海中に立てた棒にしがみつきながら塩水に浸かっている
〔所蔵：大磯町郷土資料館〕



だったから民家が密集していて、海沿いの一等地は政財界の要人が早くから別荘を構えました。また、戦前の皇族男子は軍籍を置く人が多かったから、横須賀に近いという点でも葉山や鎌倉のほうが地の利があったのでしょうか。

水沼氏と大磯駅で合流後は東海道を目指して歩く。緩やかに下る道の途中、左手の緑深い一帯は三菱財閥を率いた岩崎家の別邸跡地で、岩崎弥太郎の孫にあたる澤田美喜の記念館などがある（14-15ページ参照）。平安時代に西行が詠んだ歌にちなみ「鷗立沢」と名の付く交差点に出たら、直交する通りが東海道だ。左折して東に進めば照ヶ崎海岸に行けるが、目的地は「明治記念大磯邸園」なので西へ。しばらく歩くと、江戸時代の面影を色濃く残す松並木に出会う。大磯中学校の前から伊藤博文邸跡の「旧滄浪閣」⁰³までの街道筋、別名「元勲通り」には、江戸時代に植えられた松並木が続く。

元勲通りには、明治時代の歴代総理や政界の名士がこぞって別邸を構えていた。東から山縣有朋、陸奥宗光、大隈重信、鍋島直大、伊藤博文、西園寺公望。最初は普請道楽で知られる山縣で1887（明治20）年、場所は現在の大磯中学校付近だ。持病の関節炎の治療には山より海岸がよいと医師に勧められたのがきっかけだが、のちに伊藤にも近くに別邸を構え、政治的な交流の場になったことを嫌い、大磯の別邸は三井家に譲り、小田原に新たに構えた。

明治以降の日本の歩みを 次代に遺す邸園

陸奥の別邸跡から西園寺の別邸跡⁰⁴までは現在、明治期の立憲政治の確立に貢献した先人の業績などを後世に伝えることを目的に、「明治記念大磯邸園」としての整備が進められている。2020（令和2）年から一部開園しており、陸奥別邸跡と旧大隈別邸の庭園のほか、邸宅も外から見ることができる。

水沼氏は2000年代初頭から、大磯に残る貴重な邸宅の保存活用にかかわり、そうした動きが神奈川県「邸園文化圏再生構想」に発展し、さらに「明治記念大磯邸園」の設置へとつながった。大磯邸園では基本計画等の検討委員を務め、各邸宅の調査も行った。複数の邸宅がまとめて存続したことは奇跡といえ、「邸宅も庭園も、マンション開発などでいずれ失われるのだろうかという予測が大半でした」と水沼氏。存続していた理由のひとつに、「企業が、創業者に縁が深いとして、やすやすと手放さなかったことが大きい」と話す。

陸奥の別邸は関東大震災で大破したため、現存するのは別邸を譲り受けた古河家が昭和に入って再建した建物だ。「明治記念大磯邸園」は国の「明治150年」関連施策の一環のため、陸奥別邸跡というように名称に「跡」が付く。

一方、旧大隈別邸は、その後の増改築により外観は異なるが、構造や内部は往時の姿をとどめている。この邸宅も大隈が古河家に譲渡したため、戦後の財閥解体で古河家の財産を引き継いだ古河電気工業が2018（平成30）年まで、2棟の邸宅を会社の迎賓施設として維持・管理していた。

旧大隈別邸からも、陸奥別邸跡からも、相模湾を望むことができる。それぞれの別邸はかつて、敷地が海までつながっていた。しかし現在は海沿いに西湘バイパスが走る。「バイパスは確実に、海とこの別邸群を分断しています。海沿いを車で走ると気持ちがいいので、よく利用するんですけど」と水沼氏。研究者の立場と生活者の立場との狭間で、複雑な想いがうかがえる。

東海道に戻ってさらに少し西に進むと、低層のマンションが立っている。この場所は佐賀藩主だった鍋島家の別邸跡地で、マンションの設計は建築家の宮脇檀。2000（平成12）年の築というから、宮脇は完成を見ないで亡くなったことになる。

その西隣に、伊藤博文の邸宅だった滄浪閣の跡がある。滄浪閣は1896（明治29）年、夫人の病気療



03 | 旧滄浪閣

（伊藤博文邸跡・旧李王家別邸）

伊藤博文が建てた邸宅は李王家への譲渡後、関東大震災で倒壊したため1926（大正15）年に再建された。写真は再建後、昭和初期の様子。シンメトリックな外観、洋室と和室をあわせもつ和洋折衷の建物だ。現存する建物のうち、1992（平成4）年以降に増築された部分は解体・撤去され、隈研吾建築都市設計事務所・建文設計共同体の設計により、明治記念大磯邸園全体のエントランス施設が増築される予定
〔所蔵：大磯町郷土資料館〕



04 | 西園寺公望別邸跡・ 旧池田成彬邸

旧池田成彬邸は曾禰中條設計事務所が設計を手がけ、1932（昭和7）年に竣工。鉄筋コンクリート造の洋館で、地下1階・地上2階建て。写真は庭園側の外観と客間
〔所蔵：国立国会図書館〕



明治記念大磯邸園にて、水沼淑子氏
〔写真：編集室〕



06 | 城山荘

本館東側より見る古写真。本館は久米権九郎が「久米式耐震木構造」により設計し、1934（昭和9）年に竣工。内装には全国の社寺から集めた多くの古材を使用。建物の中央部には「養老閣」と呼ばれた4層八角形の塔屋があり、最上階は展望室になっていた【所蔵：大磯町郷土資料館】



城山荘本館の軸組模型

工事に先立ち製作された構造模型。完成した建物とは形状が多少違うが、久米権九郎が設計にあたり、城山の自然地形を活かそうとしていたことがわかる。玄関は地形の関係から地階にあった。久米が考案した「久米式耐震木構造」は、日本の伝統木造の構造とは大きく異なり、細い部材をなるべく傷つけず、縦横互いに組み合わせ、基礎から棟までを1つの籠のように組み上げるものだった【所蔵：大磯町郷土資料館】

05 | 三井高棟

実業家（1857–1948）。三井総領家（北家）第10代当主。三井家の家政改革や持株会社による事業統括などを成し、財閥体制を盤石にした。趣味人としても名高い

07 | 久米権九郎

建築家（1895–1965）。現・久米設計の創立者。ドイツとイギリスで建築を学び、帰国後に久米式耐震木構造を開発。戦後の公営住宅の団地計画で業績を残したほか、日光金谷ホテルや軽井沢の万平ホテルの設計で知られる



08 | 県立大磯城山公園 展望台

城山荘の本館跡地には現在、「養老閣」を模してつくられた展望台がある。中世の城跡でもあるだけにここからの眺めは抜群で、眼下の相模湾を前景に、富士山から伊豆半島にかけての山並みを一望することができる



09 | 大磯町郷土資料館

県立大磯城山公園の旧三井別邸地区に、坂倉建築研究所の設計により、1988（昭和63）年に建てられた。建物は記憶としての「城山荘」の佇まいをデザインモチーフとし、地形と生い茂る樹木になじむように構成されている。関連19ページ

10 | 吉田 茂

政治家（1878–1967）。外交官を経て戦後、東久邇宮内閣や幣原内閣で外務大臣を務めたのち、内閣総理大臣に就任（1946–1947、1948–1954）。皇學館大学総長や二松学舎舎長なども歴任した

養のために建てた別邸で、竣工の翌年、伊藤は本籍を東京から大磯に移し、ここを本邸とした。滄浪閣には、大磯に別荘を構える政財界人の来訪が絶えなかったという。

歴史上の人物が交差する

伊藤が1909（明治42）年に満州のハルビン駅で暗殺されたあとも滄浪閣には夫人が暮らしていたが、1921（大正10）年、養子の博邦により朝鮮の李王家に譲渡されてその別邸となった。李氏朝鮮最後の王である李垠は、伊藤を中心とした日本政府の招きにより10歳で日本に留学。伊藤が扶育にあたったことから滄浪閣にたびたび滞在し、ふたりが連れ立って大磯海岸を散歩する様子が写真や映像に残る。

日韓併合後、李垠は日本の皇族に準じた扱いを受けながら日本で成長。1920（大正9）年には皇族の梨本宮方子と結婚した。ちなみに、滄浪閣の隣に別邸を構えていた鍋島家は、方子の母である梨本宮伊都子の実家で、梨本宮家の別邸も大磯にあった。

李垠は滄浪閣を譲渡された際、伊藤の面影を残すよう、建屋の増改築をせずに修繕して利用するとして夫人を喜ばせたという。しかし、1923（大正12）年の関東大震災で建屋が倒壊したことから改築され、現存の李王家別邸が創建された。

李王家別邸は戦後、米軍に一時接収され、1946（昭和21）年に政治家・橋樑渡が買い取り、政界引退後の隠居の場とした。さらに1951（昭和26）年には政治家・堤康次郎が経営する西武鉄道に売却され、1954（昭和29）年に大磯プリンスホテルの別館となったが、2007（平成19）年に営業終了。その後は新たな民間事業者に売却されたものの、利用されなかった。李王家別邸は南側の和室・洋室を中心に、大正期の簡素でモダンな雰囲気をいまもよくとどめているという。

その西隣は、西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸だ。西園寺は1899（明治32）年、伊藤の勧めもあり、滄浪閣の隣に茅葺きの別荘を建て、「隣荘」と名づけた。建築に造詣の深かった西園寺は自ら烏口を使って図面を引き、大工に指示したといわれている。

西園寺は伊藤の没後、興津「坐漁荘」に別荘を移し、隣荘は1917（大正6）年に当時三井銀行の重役だった池田成彬に売却した。伊藤が西園寺に贈った「隣荘」の扁額は池田に引き継がれ、いまでも残る。

西園寺から隣荘を購入した池田は別邸として利用していた。関東大震災を機に、東京麻布の本邸の設計を曾禰中條設計事務所に依頼し、大磯でも隣荘を移築し、同事務所の設計により新たに鉄筋コンクリート造の洋館を1932（昭和7）年に建てた。現在残るのはその建物だ。池田と中條精一郎はともに山形県の米沢藩士の子息で、同郷のよしみがあった。また池田は、生まれ変わったら建築家か医者になりたいというほど建築への関心が強く、地震に耐える堅牢な建物を中條に要望したといわれている。

1945（昭和20）年の東京大空襲で麻布の本邸が焼失したのちは大磯を自宅とし、滄浪閣に滞在する檜橋や地域の財界人などと交流をもった。特に近隣の吉田茂は財政への意見を求めてしばしば池田邸を訪ねたという。池田は大磯のこの邸宅で1950（昭和25）年に逝去。土地と邸宅は、相続した親族により売却され、三井銀行が所有・利用していたが、2000（平成12）年に管理人が退去した。

大磯邸園ではここまでが整備される。邸宅はどれも「別邸」としてつくられ、また使われていたからだろう、歴史上の人物たちがくつろいで過ごした「素」の様子が自ずと想像され、歴史を身近に感じ、自分もその一端に連なることを思う。

東海道を再び西へ向かう。15分ほど歩くと、丘陵を部分的に開削した、いわゆる「切通し」に着く。



11 | 旧吉田茂邸

上の写真は「応接間棟」の1階「楓の間」。もとの応接間棟は1947（昭和22）年ごろ、吉田茂が総理大臣だった時代に建てられた。全体が数寄屋造りで、船底天井の「楓の間」は応接間として使われ、吉田の執務机やソファセットが置いてあった。右の写真は応接間棟2階の北西縁で、窓から富士山を望める。これに隣接する浴室は総ヒノキ造りながら、浴槽と洗面台とトイレを1室に取めたスリー・イン・ワン。浴槽は大磯の漁師が使う箱船を模して船の形をしていた。応接間棟を設計した木村得三郎は、大林組に所属していた建築家（1890–1958）。京都の弥栄会館や大阪の松竹座などの設計を手がけ、劇場建築の名手だった。詳細12-13ページ



北側と南側に分かれた山は、いまはいずれも県立大磯城山公園だが、北側にはかつて、三井高棟⁰⁵の大磯別邸「城山荘」⁰⁶が建っていた。大磯邸園周辺とは別に、このあたりにも多くの別荘があったという。高台で眺望がよく、富士山も海も見える特別感が、駅から離れているにもかかわらず別荘地として開発された理由に挙げられる。

庭園が広さを保持する価値

三井高棟は三井財閥の黄金期を築いた人物で、1895（明治28）年に大磯城山の土地を購入し、別邸「城山荘」を建てた。そして引退後の終の棲家として、数ある別邸のなかから城山荘を選んだ。居宅となる本館は関東大震災の被害を受けたため、当時、木造耐震建築を研究していた新進気鋭の建築家・久米権九郎⁰⁷に設計を依頼して改築した。

再建された城山荘は、外観は洋風、しかし屋根は茅葺きで、所々に破風のような装飾が見られる和洋折衷。内部は全国各地の社寺から集められた古材を使い、異様な雰囲気をもつ建物だった。また、敷地内に茶室如庵や薬師寺の摩利支天堂をそのまま移築するなど、大規模な作庭を進めた。高棟は生涯の集大成を表した空間として城山荘をつくり上げようとしていたと考えられている。

高棟は引退後の約15年間を城山荘で過ごし、敷地内の建築、作庭、寮場での陶器づくりや日本画の制作に明け暮れ、1948（昭和23）年に逝去。戦後は財閥解体により三井家も大きな変化を迎えたが、高棟亡きあとの城山荘は、城山荘で働いていた家職たちの手によって維持・管理された。しかし1970（昭和45）年、三井家から名古屋鉄道へ所有が移り、保存と維持が困難という理由で、如庵などの一部の建物を除いて建物は解体・撤去された。敷

地は県立大磯城山公園として整備され、園内には展望台⁰⁸や大磯町郷土資料館⁰⁹がある。

城山公園の南側には吉田茂¹⁰の邸宅¹¹がある。吉田は1945（昭和20）年から他界する1967（昭和42）年まで、この家に暮らした。戦後の増改築の際は建築家の木村得三郎、次に吉田五十八が設計を手がけたが、2009（平成21）年に焼失した。

現在公開されている「旧吉田茂邸」は、木村の設計による「応接間棟」と吉田五十八の設計による「新館棟」を中心に復元された建物だ。焼失前を知る水沼氏は「この邸宅はもともと、増改築を重ねた4棟構成で、それらが折り重なるように建っていたのが興味深かった」と語る。その片鱗はいまの姿からもうかがえる。

母屋に隣接するサンルームと、庭園内に建つ「七賢堂」¹²、庭園入り口の兜門は焼失を免れ、吉田存命時のものが残る。七賢堂は、もとは伊藤が岩倉具視、三条実美、大久保利通、木戸孝允を祀る四賢堂として滄浪閣の敷地内に建てたものだ。立憲政治の立役者たちと戦後日本の礎を築いた宰相の想いが、ここで一点に結ばれる。

大磯に残る「邸園」は、いまを生きる私たちが未来を考えるうえでの縁となる文化遺産で、実物が残ることの意味は大きい。水沼氏は「大磯の邸園は豊かな自然環境とともに残り、特に庭園が切り売りされることもなく、当時の広さを維持しているのは稀有なこと。全国的に見ても貴重です」と話す。貴重だということを多くの人と共有できたからこそ、大磯邸園の設置に向けては公民の垣根を越えて多くの人が力を合わせた。「貴重な遺産を次代に継承するために、大事だと思ふものは大事だと言いつづけることが重要だと思っています」。水沼氏のこの言葉は、これまでを振り返るものであると同時に、未来に向けたものでもある。



旧吉田茂邸

庭園から見る。左手のサンルームは1964（昭和39）年、吉田五十八の設計により増築されたもの。2009（平成21）年の火災では焼失を免れたが、外装に焼け跡が残る。細身の鉄骨材による骨組みや軒を曲面としたポリカーボネート屋根など、現代的な材料を繊細かつ優美な意匠でまとめている



12 | 七賢堂

伊藤博文が1903（明治36）年に滄浪閣の敷地内に建てた「四賢堂」は、伊藤の没後に夫人が伊藤を加えて「五賢堂」と呼ばれた。吉田茂は1960（昭和35）年、その祠堂を自邸の敷地内に遷座し、西園寺公望を合祀。吉田の没後は吉田も加えられ、「七賢堂」と改められた。二間四方の入母屋造銅板葺きで、正面は虹梁を通して棧唐戸風の引き戸を入れている。組物は平三斗、軒は二間で、正面を平行垂木、側背面を扇垂木としている

水沼淑子 みずぬま・よしこ
1953年神奈川県生まれ。1976年日本女子大学家政学部住居学科卒業。1981年同大学大学院修士課程修了。工学博士。専門は近代日本住宅史。2002年より関東学院大学人間環境学部（現・人間共生学部）教授。2020年より同大学名誉教授。

長井美咲 ながい・みあき
編集者、ライター／山形県出身。日本女子大学家政学部住居学科卒業後、『室内』編集部に所属。2006年よりフリーランス。

MAP 2

10

旧大隈重信別邸・旧古河別邸

竣工 | 1897年以前

設計 | 不詳

大隈重信が過ごした 明治時代の様子をとどめる海浜別荘

大隈重信が1897(明治30)年に購入して改修し、避寒・避暑の別荘として利用していた邸宅。そのうち1901(明治34)年に古河財閥の創業者である古河市兵衛が購入し、古河別邸として使われ、戦後は古河電気工業の迎賓施設として維持・管理されてきた。木造平屋の寄棟造で、延べ面積は約388㎡。現在は金属板葺きだが、明治のころは茅葺きだったという。

16畳の「富士の間」と10畳の和室の2間続きが主室で書院造。大隈はこの広間でたびたび大宴会を開いたといわれる。中庭を挟み、9畳の「神代の間」と6畳の2間続きは大隈が書斎として使っていた。片足を失った大隈の身体に配慮して、神代の間には暖炉が備えられていた。玄関が西向きなのは、大隈家にとっては旧主である鍋島公の別邸が西隣にあったからだといえる。旧主に背を向けることのないように、という配慮だ。

現在の建物は明治の土地台帳と比べてみると、北側の水まわりが増改築され、富士の間の南側の広縁は改築時に広げられ、神代の間の暖炉は床の間となっていることがわかる。

庭園は古河邸時代のものが概ね現存すると考えられている。邸宅からならかに下って海岸につながっており、海沿いの松林や相模湾などを借景とした構成だ。芝庭やツツジが群植され、和洋折衷の庭園となっている。



1



2

- 1 大隈の書斎だった「神代の間」。神代杉を使っていることから、こう呼ばれた
- 2 主室の「富士の間」から「神代の間」方向を見る
- 3 庭園側から見る。右の棟が「神代の間」。創建当時は樹木も低く、海との間に道路もなかったため、邸宅の前庭から海を眺めることができたといわれる。大隈はこの別邸で暮らした4年ほどの間に、防風・防砂のための松を植えたといわれる



3

MAP 2

11

陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸

竣工 | 1930年

設計 | 葛西田中建築事務所

海浜別荘の特徴を備えた 昭和初期の瀟洒な数寄屋風の邸宅

外務大臣等を歴任した陸奥宗光の別邸跡地に、1930(昭和5)年、古河家3代目当主の虎之助が別邸として再建した邸宅。陸奥別邸は1896(明治29)年に建てられ、陸奥の没後、次男の養子先である古河家が取得。関東大震災で一部が大破したため古河虎之助により改築されたといわれる。葛西田中建築事務所の設計による瀟洒な数寄屋風の住宅建築で、敷地・庭園も合わせて昭和初期の姿をよくとどめる貴重な別荘遺構と評価されている。

葛西田中建築事務所は、辰野金吾と共同で設計事務所を営み、旧中央停車場(現・東京駅)などを設計した葛西萬司が、辰野の没後、清水組(現・清水建設)技術部長だった田中実と共同経営した事務所だ。田中は清水組時代に古河家の麻布別邸を設計したほか、恩師・辰野の監修下で旧唐津銀行本店(1912)を設計したことでも知られる。

木造平屋の寄棟造で棧瓦葺き。延べ面積は約373㎡。「聴漁荘」の扁額を掲げた玄関を入り、南側の2間続きの和室が応接間兼主人室。床の間付近から庭園の景色を最もよく眺めることができる。中央の10畳と8畳は家族の部屋で、その西側が茶の間。家族の部屋の北側には湯殿(浴室)があり、屋外から直接入れ、シャワーや足洗い場を備えるなど、海浜別荘らしい造りだ。

斜面地形を活かした滝石組のある日本庭園は、井戸からの流れに沿ってツツジなどが植栽された回遊式。バラ園や果樹園も配置されている。



1



2

- 1 2間続きの応接間兼主人室の南側、庭園に面して設けられた縁側。開口部を大きく取っており、冬は居室の奥まで日差しが届いて暖かく過ごせたりと評判だ
- 2 「聴漁荘」の扁額が掲げられた玄関は東側にある
- 3 数寄屋風の建物で、平面は雁行配置。一番奥が主人室のある棟、その手前、壁に丸窓を設けた棟には家族の部屋があった



3

旧吉田茂邸

応接間棟竣工 | 1947年ごろ 新館棟竣工 | 1960年代前半
 再建 | 2016年

設計 | 木村得三郎(応接間棟)、吉田五十八(新館棟)

吉田が総理大臣時代から 亡くなるまで暮らした4棟構成の邸宅

戦後に内閣総理大臣を務めた吉田茂が暮らしていた邸宅。吉田はここで1967(昭和42)年に息を引き取った。ただし、2009(平成21)年に発生した火災により母屋は全焼。現在見られるのは「応接間棟」と「新館棟」を中心に復元された建物で、大磯町郷土資料館の別館として運営されている。

もとは1884(明治17)年、吉田の養父・健三が土地を購入し、別荘を構えたのが始まり。焼失前の吉田邸は、大正時代に建てられた旧館棟、昭和10年代に吉田の書齋として建てられたペランダ棟、戦後に大磯を本宅として使いはじめたのにもなって1947(昭和22)年ごろに増築した応接間棟、海外からの賓客を迎えるために昭和30年代に増築した新館棟、計4棟で構成されていた。吉田は部屋の公私を明確に分け、使用人の動線も別に設けられていた。

応接間棟は劇場建築を多く手がけた建築家・木村得三郎の設計で、1階「楓の間」は執務室兼応接間、2階は吉田の私室。新館棟は建築家・吉田五十八の設計で、五十八は既存の食堂や玄関・玄関ホールを改修も行った。

新館棟には賓客を迎える応接間「金の間」と、吉田の寝室「銀の間」がある。いずれも部屋の装飾に金・銀を用いていることが名称の由来だ。吉田は「金の間」からの富士山の眺めを毎日のように楽しみ、亡くなる前日も「富士山が見たい」と病床でつぶやいたという。

- 1 吉田五十八が設計した新館棟の1階にある食堂。吉田茂がバラを愛したことから、ローズルームとも呼ばれた。室内はアール・デコ調で、壁は合皮を用いた緞子張り。当初は羊皮だった
- 2 木村得三郎が設計した応接間棟2階の私的な書齋。官邸直通の黒電話が置かれていた
- 3 玄関ホールと、光を採り入れる中庭
- 4 新館棟2階の「銀の間」。寝室として使われていた
- 5 賓客を迎えるための応接間として利用されていた「金の間」。隣の「銀の間」と対をなすかたちで、装飾品に金を使用
- 6 玄関付近からサンルームを見る。サンルームは西北隅の人工地盤の上に建っている



1



2



3



4



5



6

混血孤児を救った澤田美喜 記念館は免震建築の先駆け

取材・文 | 磯達雄
写真 | 小松正樹

大磯は日本でいち早く別荘地として発展し、政治家、実業家、文化人など、多くの著名人が別荘を構えた。三菱財閥の岩崎弥之助もそのひとり。その敷地は戦後の財閥解体で国に接収されるが、三菱3代目当主、岩崎久弥の娘である澤田美喜によって買い戻され、混血児のための児童養護施設が設けられる。そしてここには、澤田の記念館として日本で最初期の免震建築も実現した。

大磯駅からすぐ近くに、緑に覆われた丘のエリアがある。ここに児童養護施設のエリザベス・サンダース・ホームと学校法人聖ステパノ学園がある。エリザベス・サンダース・ホームは、太平洋戦争のあと、駐留軍の男性と日本人の女性の間に生まれた混血児の孤児を救うための施設として、1948（昭和23）年に始まった。そして、その子どもたちが通う学校として、聖ステパノ学園が1953（昭和28）年に設立されている。

ともに創設者は澤田美喜だ。三菱財閥の3代目当主だった岩崎久弥の長女で、1901（明治34）年生まれ。成長して外交官と結婚し、さまざまな赴任地で海外での生活を経験するなかで、キリスト教の社会福祉活動に接し、自分でもこれに取り組まなければならないと思うようになったという。

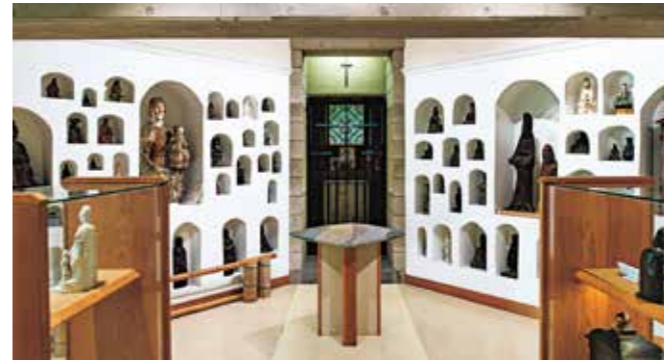
この敷地はかつて、岩崎家の別邸があったところ。戦後の敗戦処理にともなう財閥解体で国に接収され、岩崎家三代は買い戻すことが禁止されていたが、澤田はこれを日本聖公会の事業とすることで取り戻し、ホームを建設する。そして1980（昭和55）

年に亡くなるまでの32年間に、約2,000人もの混血児を育てあげ、世の中に送り出していった。ちなみにエリザベス・サンダース・ホームは、遺産のすべてを寄付して、ホームの設立に寄与した女性の名前から付けられたもの。ただし澤田の洗礼名もエリザベスであるため、2人の名前を合わせたものとも言える。

こうして大磯に、深刻な社会問題にもなっていた混血児の救済を掲げた施設が誕生することとなった。

隠れキリシタンの遺物を展示 それは“魂の療養所”でもある

エリザベス・サンダース・ホームや聖ステパノ学園は関係者以外立ち入り禁止だが、敷地内には澤田美喜記念館があり、ここは一般の来訪者も入ることができる。この施設では、澤田自身が九州の島々を巡って40年間にわたり収集した貴重な隠れキリシタンの遺物を展示している。設立趣意書で澤田はこうのように記している。



3



4



5

「殉教者の子孫が大切に守ってきた品々に私は強い信仰の息吹きを感じます。そしてこの数十年間、子供達を守り育てる仕事の中で、私は幾度これらの遺物の前で祈り、カブけられたか分かりません。（中略）私はこの得難い経験を私有することをやめて世の多くの方々の為に魂の療養所を建設し、キリシタン遺物のすべてをお届けしたいと思います」。

1980年（昭和55）年、澤田はスペインで客死してしまいが、その遺志を継いで建設資金集めは続けられ、7年という年月を経たのちの1987（昭和62）年、記念館は完成した。

建物は上から見ると六角形で、これはノアの方舟をイメージしたものとされる。1階は展示室。奥の壁には大小のニッチが穿たれ、ここにマリア観音像が納められている。さらにその奥はお御堂となっている。2階は礼拝堂となっており、そこへ至る階段には、ステンドグラスを通して美しい光が差し込む。

設計した三宅敏郎は、日本電信電話公社の建築部に勤め、大澤秀行とともに担当した中国電機ビル（1958）で日本建築学会賞〈作品〉を受賞している建築家。澤田の意を汲んで、全体に質素でありながらも、“魂の療養所”としての雰囲気をつたえた建築づくりを成功させている。

構造評定を受けて実現した 日本で初めての免震建築

この建物には、もう一つの注目すべき点がある。免震構法を採用した日本で最初期の建築なのである。

免震構法とは、建物の上部構造と下部構造の間に衝撃を吸収する免震層を挟み込んだもので、免震装置は上部構造を支えつつ揺れが伝わりにくくする「アイソレーター」と、揺れを減衰させる「ダンパー」の組合せからなる。「アイソレーター」には積層ゴムが多く使われる。

積層ゴムによる免震建築が日本で初めて実現したのは、1983（昭和58）年に完成した千葉県八千代台住宅である。免震研究の第一人者だった福岡大学の多田英之教授が中心となって進めた実験的なもので、建築基準法第38条の大臣認定を得て建設されている。この流れを受けて、日本建築センターでは免震建築の構造評定を開始。その第1号となったのが、澤田美喜記念館だった。

免震構法を採用した理由について、構造設計を担当した東京建築研究所の山口昭一は、「通常の構法では応答加速度が過大となり、展示内蔵物の保全対策が非常に難しいなどの諸条件を考慮」と説明している（『建築技術』1987年6月号）。澤田が遺したコレクションを守ることが、何より優先されたというわけだ。

採用された免震装置は、直径435mm、ゴム厚4mmの25層の積層ゴムのアイソレーターと、ループ状の鋼材ダンパーである。これが基礎と建物の上に設置されており、免震クリアランスの隙間からのぞき見ることもできる。

構造技術史のうえでも重要なこの建物に、大磯訪問の際、立ち寄ってみてはいかがだろうか。

- 3 澤田美喜記念館の1階、展示室。マリア観音像、踏み絵、キリスト像が投影される鏡など、隠れキリシタンの遺物を300点余り展示している。記念館ホームページにて、所蔵品の一部を見ることが出来る。澤田美喜記念館 <https://www.elizabeth-sh.jp/memorialmuseum/>
- 4 2階、礼拝堂。トップライトからの光が内部空間を充たす
- 5 澤田美喜記念館の正面。ノアの方舟をかたどったとされる六角形平面の建物

- 1 澤田美喜記念館の免震層を、大きく取られた免震クリアランスの隙間から見る
- 2 澤田美喜記念館の免震装置。右が積層ゴムのアイソレーター、左が鋼材ダンパー



1



2

磯達雄 いそ・たつお
建築ジャーナリスト／1963年埼玉県生まれ。1988年名古屋大学工学部建築学科卒業。1988-1999年日経アーキテクチャ編集部勤務。2002年-2020年3月フリックスタジオ共同主宰。2020年4月よりOffice Bungaを共同主宰。現在、桑沢デザイン研究所および武蔵野美術大学非常勤講師。

大磯・平塚・茅ヶ崎建築めぐり

OISO・HIRATSUKA・CHIGASAKI

参考
 ・栗田勇監修『現代日本建築家全集6：谷口吉郎』三一書房、1970
 ・伊藤嘉一・小中陽太郎・坂上寛一・高津茂編『大磯学：自然、歴史、文化との共生モデル』創森社、2013
 ・大磯町ホームページ「大磯建物語」(http://www.town.oiso.kanagawa.jp/soshiki/toshikensetsubu/toshi/tanto/keikan/kenzoubutsu/12955.html) 2021.10.1アクセス
 ・東海大学学術資料センター編「東海大学湘南キャンパス散策ガイドブック」東海大学学術資料センター、2012
 ・太陽の郷ホームページ「南湖院の歴史」(https://www.taiyosato.co.jp/nankoin/) 2021.10.1アクセス
 ・谷口吉郎編『記念碑散歩』文藝春秋、1979
 ・平塚市博物館ホームページ「ひらつか歴史紀行」(https://hirahaku.jp/web_yomimono/hirareki/index.html) 2021.10.1アクセス
 ・文化庁 国指定文化財等データベース (https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index) 2021.10.1アクセス

おことわり
 04-21ページの作品名称は文化財指定名称とし、ほかは原則として2021年10月時点の施設名称を使用しています。

平らな印象の湘南も、大磯から西は大磯丘陵が海岸まで迫る山間の地だ。この大磯丘陵の東端が大磯、西端が国府津だが、どちらも気候が温暖で明治期から有名な別荘地となった。特に大磯は海水浴場を契機に栄えた、海浜別荘地だ。時は鉄道黎明期。東海道線開通の影響も大きい。大隈重信、陸奥宗光、伊藤博文、西園寺公望、吉田茂、三井高棟など政財界重鎮の邸宅が集まっていた。また詩人・島崎藤村も晩年居を構えている。県立大磯城山公園の郷土資料館で情報収集ができる。

今回は大磯から足を延ばし、周辺の注目建築も紹介しよう。隣の平塚はかつての軍需工

業都市。海軍火薬^{かやくしょう}廠があったところで、空襲により町の大半を焼失。しかし関連施設が保存・復元され活用されている。茅ヶ崎では東洋一のサナトリウム「南湖院」の遺構に注目。少し離れた香川周辺には蔵元・熊澤酒造の一連の建築群がある。当主は建築に造詣が深く、古建築が利活用されている。秦野近くまで北上するとそこにあるのは東海大学湘南キャンパス。山田守の名作群が見られる。さらに足を延ばせば、関東の信仰地「大山」には「茶寮 石尊」があり、一度は訪れておきたい。

写真 | 小松正樹



01

蒔絵工房 NAMIKI

設計 | 不詳
竣工 | 大正後期
平塚市西八幡1-4-3 (パイロットコーポレーション 平塚事業所内)
初の純国産万年筆の開発・製造を成功させたパイロットコーポレーションの蒔絵万年筆の工房兼展示施設。歴代の技巧をこらした蒔絵万年筆が並ぶ。建物は、大正後期に建てられた第二海軍火薬廠を活用したものだ。平塚一帯は、国内最大規模の火薬廠が存在した地。同社の平塚事業所は、旧海軍火薬廠跡地の払い下げを受け1948年に開設。当初は火薬廠が連なっていたが、整備にともない規模を縮小。昭和中期に現在の建物規模となり、以来、大切に保存されてきた。ドアノブ、蝶番などは大正時代のものでそのまま残る。高い天井、分厚い煉瓦壁は火薬廠ならではの特徵だ。見学は要予約



02

平塚市美術館

設計 | 日建設計
竣工 | 1990年
平塚市西八幡1-3-3
積極的な教育普及活動でも知られる市立美術館。平塚は、1945年の大空襲で旧市街の約60%が大規模な被害を受けた。その復興のなか、地域の作家たちが中心となり美術館建設を発起。その後、市民や行政が一体となり「県立よりも大きな美術館を」という思いから誕生した。「動線も機能的。開館から現在まで大きな改修なく至っています」と安部学芸員。2階に常設・企画展示室を配し、1階は市民アートギャラリーやアトリエとして、屋外展示空間とともに地域に開放。特徴的な外観は、周辺に立ち並ぶ工場を目隠しする役目もつ



04

旧南湖院第一病舎

棟梁 | 小島伊勢松 竣工 | 1899年
茅ヶ崎市南湖7-12869
不治の病と恐れられた結核の診療に一生を捧げた医師・高田研安によって設立され、最盛期には5万坪の敷地を誇り、東洋一と謳われたサナトリウム「南湖院」の遺構のひとつ。茅ヶ崎市の発展に大きな影響を与え、医療、文化的側面からも貴重な遺産だ。跡地には孫の高田準三により老人ホーム「太陽の郷」が設立され、敷地に点在する南湖院遺構が守られてきた。第一病舎は、2015年に高田家より茅ヶ崎市に寄贈され、市と太陽の郷が協働し「南湖院記念 太陽の郷庭園」として一般公開している。第一病舎のほか、南湖院時代の藤棚や丸池などがいまでも残る。国の登録有形文化財



06

北蔵ギャラリー

設計 | 不詳 竣工 | 1941年
大磯町国府本郷551-1 (県立大磯城山公園内)



かつて三井総領家の別邸「城山荘」が構えられた地・大磯城山公園。財閥解体後に三井の手を離れ長く放置されてきたが、公園化計画により1990年に公園として開園。城山荘の一部として、「東蔵」とともに今井町本邸にあった茶道具や骨董を保管する蔵として建てられた「北蔵」は、現存する貴重な建物。現在は、ギャラリーとして一般公開されている

03

旧横浜ゴム平塚製造所記念館

(八幡山の洋館)
設計 | 英国人技師 (カリ・およびウィルソン)
竣工 | 1906年ごろ
移築・復元 | 2009年
平塚市浅間町1-1 (八幡山公園内)



関東大震災での倒壊を免れ、平塚大空襲でも焼け残った、明治期の木造洋風建築の姿をいまに伝える建造物。日英合資で設立された「日本爆発物製造株式会社」の支配人室として建設。その後、日本海軍が同社を買収し海軍火薬廠となってからは将校クラブとして、戦後に横浜ゴムが払い下げを受けてからは、応接室や会議室として利用された、平塚の歴史とともに生きてきた建築だ。一時は解体の話もあったが、移築・復元工事を経て、現在は資料館・イベントスペースとして広く活用されている。国の登録有形文化財



05

太陽の郷プールガーデン

設計・施工 | 竹中工務店
前身のプール竣工 | 1983年
移築 | 2007年
茅ヶ崎市南湖7-12869-1 (南湖院記念 太陽の郷庭園隣接)



高田研安の孫・準三が創設した有料老人ホーム「太陽の郷」の付帯施設として建設したプール棟を、ホームの環境整備にともない再構築した水中リハビリのできる温水プール施設だ。国内でも先駆的な大規模木造集成材による構造フレームが心地よいプール空間をつくり出し、屋根一体型の集熱パネルが、プール水・シャワー水の熱供給システムとして見事に機能している。南湖院の遺構のひとつである旧医局 (1930年竣工) の外装をもとにそのまま残しながら、受付フロントや更衣室として利活用。再建に合わせて環境性能をさらに高めた点も注目だ。太陽熱を集めてつくる温水は、壁・床に流して放射熱暖房としても利用。天井のアルミシートや内壁のガルバリウム鋼板は、熱損失を緩和し、反射光で明るさを得るための仕掛けだ。自然エネルギーを巧みに利用することで、一般的な屋内温水プールと比べて年間のCO₂排出量は1/3程度という環境性能の高さを誇る。丁寧な施設管理がそれを支えている



07

大磯町郷土資料館

設計 | 坂倉建築研究所 竣工 | 1988年
大磯町西小磯446-1
建築設計者と展示設計者が、プロポーズ段階から協力し合い、実現に至ったプロセスにも注目だ。両者の意見の融合は、「城山荘」の建築構造模型の発見にあった。2016年には、大磯の別荘文化を軸に展示内容をリニューアルし、発見された「三井別邸 城山荘」の欄間部材が、エントランスホールに復元展示されている [写真: 石田篤]



12

嶋立庵

設計 | 不詳
竣工 | 江戸時代
(基本部分)
大磯町大磯1289



東海道沿いに立つ、300年以上続く俳諧道場。江戸時代初期に小田原の崇雪がこの場所に嶋立沢の標石を建て草庵を結んだことに始まり、第一世庵主が入庵して以来、現在、第二十三世庵主へと続く。当初は、隣接する大磯町役場まで敷地が広がっていたが規模を縮小。敷地内には、歴代の庵主が居住した嶋立庵室、俳諧道場、円位堂、観音堂が並び、近年の調査で建物の基本部分は江戸時代、他は江戸時代以降に増築・建築されたものとされる。歴代の庵主の句碑や湘南発祥の地を示す史跡もあり、連続と受け継がれてきた句の世界と空間に触れられる場所だ

13

茶屋町路地

(茶屋町カフェ、つきやまBooks Arts & Crafts、ギャラリーお風呂場)
プロデュース | 原大祐 竣工 | 昭和前期 改修 | 2014年より順次
大磯町大磯1157



昭和前期に分譲された建物2棟を改修した複合施設。大磯港で催される朝市「大磯市」に参加する若い地元クリエイターを中心に、「コミュニティが交差する場所をつくりたかった」と原大祐氏。離れの風呂場はギャラリーに、居酒屋はブックショップに、民家はカフェとして再生し、町内会の「茶屋町」の名にちなみ「茶屋町路地」と名付けた。建具や家具は、手持ちの部材や知人から譲り受けたものを利活用。カフェには、旧三井守之助別邸 (関連MAP16) の照明も加わった。近年、取り壊される邸宅や廃業する商店が増えるなか、原氏は、朝市「大磯市」の運営や大磯の荒廃農地再生、団地再生にも積極的に取り組んでいる。その根底にあるのは「高校生のあるところ大好きだった大磯をどう維持するか」という思いだ



14

澤田美喜記念館

設計 | 三宅敏郎
竣工 | 1987年
大磯町大磯1152

▶ p.14-15参照

15

島崎藤村の墓

設計 | 谷口吉郎
竣工 | 1949年
大磯町大磯1135 (地福寺内)

大磯の自宅で亡くなった島崎藤村。遺族の願いを受け、梅が美しい地福寺の境内に土葬され、七回忌に現在の墓に改葬し、墓碑を谷口がデザインした。藤村が若き日に信仰した「キリスト教的な意匠を、ほのかに添えた」細い墓標と端正な構成。真っ黒な寝棺を思わせる花崗岩の台石は「地下に埋められている棺を暗示するために」と谷口は記す。碑銘は有島生馬による。梅の老木のもと、横には藤村の墓を模した妻・静子の墓が静かに寄り添う



▶ p.08参照

08

旧吉田茂邸

設計 | 木村得三郎 (応接間棟)、吉田五十八 (新館棟)
竣工 | 1947年ごろ (応接間棟)、1960年代前半 (新館棟)
再建 | 2016年
大磯町西小磯418 (県立大磯城山公園内)

▶ p.09、p.12-13参照

09

七賢堂

竣工 | 1903年 移築 | 1960年
大磯町国府本郷551-1
(県立大磯城山公園内)

▶ p.09参照

10

旧大隈重信別邸・旧古河別邸

設計 | 不詳
竣工 | 1897年以前
大磯町西小磯85ほか
(明治記念大磯邸園内)

▶ p.10参照

11

陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸

設計 | 葛西田中建築事務所
竣工 | 1930年
大磯町西小磯85ほか
(明治記念大磯邸園内)

▶ p.11参照

16

もあな・こびとごや、Post-CoWork

プロデュース | 原 祐
改修設計 | 和田義之 / KEMURI DESIGN 改修 | 2021年
大磯町大磯1043-1

「大磯では商店の減少が地域課題でした。それは昼間人口が少ないから。子育てと仕事場が接近して趣味も楽しめる。そういう暮らしを提案したいと数年前から考えていました」と原祐氏。その思いが、大磯郵便局の遊休資産を活用した保育園とワークスペースの誕生につながった。郵便局の鉄骨造の車庫は、保育園に改修。園舎に使われたのは、かつて大磯にあった旧三井守之助別邸の保存部材だ。天井材の屋久杉は腰壁に、ステンドグラスや雨樋、塀にも旧三井邸の部材が活用されている。「邸宅の部材はまちの資産。触れるなかで、子どもたちが地域資産を残したいと思ってくれたら」と原氏。鉄筋コンクリート造のもと資料保存庫は、もとからあったスチールラックを中心に、手持ちの素材を活用したワークスペースへと改修。「大磯暮らし」の実践が始まっている



17

旧木下家別邸

(大磯迎賓館)
設計 | 小笹 三郎 (本館)
※推察
竣工 | 1912年 (本館)
大磯町大磯1007

貿易商・木下建平が別荘として建築し、地元の人々から「三角屋敷」と呼ばれ親しまれてきた洋館。国内では最初期とされるツーバイフォー工法が採用されている。所有者と用途を変え、いく度となく消失の危機に直面しながら、建物は「大磯迎賓館」の名で、建物に合わせて調度品をしつらえ直し、地元の食材を使ったイタリア料理店として活用されている。建設当時のステンドグラスが残る2階のサンルームからは相模湾が一望できる。国の登録有形文化財



18

高田保墓碑

設計 | 谷口吉郎
竣工 | 1954年
大磯町東小磯981ほか
(高田公園内)

大磯の旧島崎藤村邸を終の棲家とした、劇作家・随筆家の高田保。地福寺で行われた藤村の墓碑の打ち合わせの席で谷口と知り合い、大磯に新築する高田の自宅の相談が進められていたなか急逝。高田を慕う町民の願いを受け、見晴らしのよい高台に公園がつくられ、墓と文学碑を兼ねた墓碑を谷口がデザインした。「さりりと明るいのにしたかった」と谷口。香箱をかたどった黒御影の墓石、背後に立つ大谷石の塀にはめられた色紙形の石には、故人の筆蹟が刻まれている



19

東海大学湘南キャンパス

設計 | 山田 守 (1~3号館、松前会館)
竣工 | 1963年 (1号館)、1964年 (2号館)、1966年 (3号館、松前会館)
平塚市北金目4-1-1

創設者の松前重義と通信省時代からの盟友であり、資金調達からキャンパス計画、校舎群の設計に力を注いだ山田守。設立と同時に理事に就任し、主任教授として自ら教壇に立った。1962年にキャンパス建設が開始され、1966年に没するまでの間に完成した建物は16棟にも及び、山田亡きあとは山田建築事務所の弟子たちに計画が受け継がれ完成した山田建築の集大成だ。なかでもキャンパスを東西に貫く富士見通り沿いには、「東京厚生年金病院」(1953)以降多用したY字型の平面をもつ1号館、扇が2枚結合したような2号館、螺旋形スロープをもつ高層の3号館、曲線と曲面が美しい教員用宿泊施設・松前会館と、山田の設計がキャブラリーが濃密に詰まっている。東海大学湘南キャンパスと校舎群として、日本におけるDOCOMOMO選



20

茶寮 石尊

設計 | 不詳
改修設計 | 堀部安嗣建築設計事務所
竣工 | 大正期 (客殿)、平成期 (応接室)
改修 | 2019年
伊勢原市大山12

江戸庶民の信仰と行楽の地として知られる「大山」の中腹、標高約700mの場所に、神社をより身近に感じてもらうために生まれた茶寮だ。普段使われていなかった下社客殿の和室と応接室を改修し、既存の和室のしつらえを活かした座敷席、応接室を改築したテーブル席、縁側、テラスと続く。床や天井レベルを微細に調整しながら、雄大な遠景だけでなく中景や近景を巧みに取り込んでいる。建設資材はモノラックでの運搬に限定されたが、その制約を感じさせない静謐な空間が広がる。この茶寮のほか、阿夫利神社では大山の文化発信に力を入れており、伊勢原市の公式YouTube「大山歴史講座」で語られる大山の歴史は、ぜひ見ておきたい



21

熊澤酒造

(蔵元料理 天青、MOKICHI TRATTORIA、mokichi cafe、mokichi baker&sweets+wurst、okeba)
改修設計 | 和田義之 / KEMURI DESIGN
改修 | 1996年より順次
茅ヶ崎市香川7-10-7

住宅地の一角に立つ、1872年創業の湘南唯一の蔵元の施設群。メタセコイアの木がそびえる中庭を中心に、タイプの異なる建築が不思議な調和をもって立ち並ぶ。「もとは町工場みたいな場所でした。廃業の危機にあった酒蔵を存続させたいと考えた結果、自然のままの形になったんです」と、6代目当主の熊澤茂吉氏。企画・運営、ハードの計画も自ら行う。先代から受け継いだ日本酒づくりを核に、ビールやパンの製造・販売、それを楽しむレストランと、ソフトの変化に合わせて施設が増殖。敷地内にあった蔵は曳家してベーカリーに、倉庫は湘南地域の作家の作品を中心としたギャラリーに(写真上段中央)、小屋組みが圧巻のカフェは築200年と伝わる青森県の民家を移築・再生したものだ(写真上段左列下)。取り壊しの危機に瀕した実業家・菅原通済の邸宅(築450年)と美術館を移築したトラットリアは、裏山の自然と一体となり、元からここにあったような佇まいを見せる(写真上段右および下段)。仕込みタンクが並んでいた酒蔵は吹き抜け空間を中心とした和食レストランに生まれ変わった(写真上段左列上)。余計なデザインはせず、既存をそのまま使うがモットーだ。「施設1つの構想から完成までに5~6年。完成後も常に変化しています」と熊澤氏。この場所を中心に、湘南地域の未来を見据えた活動が紡がれている

